

# ズィーベンビュルゲンにおけるルターとシラー

鈴木 道 男

序 11月10日

ルターとズィーベンビュルゲンとホンテルス

シラーが描いたズィーベンビュルゲン

シラー祭の多様性 ルターとシラーとズィーベンビュルゲン

序 11月10日

拙論『トランシルヴァニアのシラー祭』Ⅰ～Ⅲ（鈴木 2018, 19, 20）では、トランシルヴァニアのドイツ人地域のうち、主にカルパチア山脈と現在のハンガリー国境の深い森に囲まれた盆地、即ち古来のトランシルヴァニア、そのドイツ人地域ズィーベンビュルゲンに12世紀以来住み続けるドイツ人たち（「ザクセン人」<sup>1)</sup>）を扱い、彼らが改めてドイツ本国との完全な連帯を意識する過程におけるシラー祭の意義を確認した。

「ザクセン人」の殆どは現在もルター派の成員である。本稿ではシラーとルター、この二人の人物によって彼らがドイツ人、特にドイツ本国のザクセン人と一体化したアイデンティティを確認する。しかし彼らはザクセン領となったことがない、現在のルクセンブルクとその近辺からの移住者の子孫であることが、その言語と出身地に倣った地名の命名等から証明されている<sup>2)</sup>。主要言語地域と隔離された「言語島」(Sprachinsel)の言語は、一般的に経時的变化が遅く、語彙とその文法、発音を維持する率が高いので、文献との比較で出自の推定が容易なのである。

実は、800年以上の昔ハンガリー王の招きで開発のため移住した彼らが、ハンガリー人でもトルコ人でもなく、オーストリア人でも二重王国時代のハンガリー人でもなく、ヴェルサイユ条約以来トランシルヴァニアを支配しているルーマニア人でもなく、(国籍は別として)あくまでもドイツ人であるのは、遠隔の地の言語島の住民とはいえ、彼らが多くの中世都市ブルク<sup>3)</sup>を形成し、その中における使用言語の連続性を堅持したことによるのが大きいのは当然である。しかしプロイセンによる1871年のドイツ統一に際してもバイエルンなどはドイツ帝国傘下の王国のままであり、オーストリアを併合するヒトラーの時代まで本国が決して一つのドイツを形成したことがなかったこと、神聖ローマ帝国の時代のように長い間「ドイツ世界」(Deutschtum)が形式的な纏まりしか持たなかったことを思えば、彼らの「ドイツ人」意識の

- 1) 本論が「ザクセン人」と括弧付でと呼ぶのは、12世紀トランシルヴァニアに入植し、以後独自の都市を多数構築し、独自のドイツ世界(Deutschtum)を育みながら現在に至るまで居留しているズィーベンビュルガー・ザクセン人のことであり、次注に述べる方言研究が明かしているように、ドイツ本国のザクセンとは本来的に関係が薄い。しかしハンガリー語でドイツ人を指すサーシュが最初はザクセン人を指していたため、彼ら自身が長い歴史の中で自らをザクセン人と重ねるに至り、とくにザクセンのルターの宗教改革受容以降は、「ザクセン人」はザクセンと緊密な関係を持つに至った。
- 2) 早くから、ドイツからの旅行者らがそれに気づいていた。学問的に徹底的に分析したのはカール・クルト・クラインである(K. K. Klein 1961, 1966 及び Klein, K. K. u. Schmidt, L. E. 1961 参照)。
- 3) ズィーベンビュルゲン(Siebenbürgen)は「七つのブルク(Burg)」の意味だが、どの7都市を指すかについて定説はない。むしろ、ズィーベンビュルゲンの首都格ヘルマンシュタット(現シビウ)がツィビン川沿いに発展し、その中心部がツィビンプルクと呼ばれたことに始まるという説が近年有力であること(Wagner 1995 S.128 参照)については以前も触れた(鈴木 2002 S.2 f.)。

内実が変化してきたのも当然である。主要ドイツ語圏と同時に1859年の生誕100年祭以降シラー祭を祝ってきたことは、彼らと本国、即ち小ドイツ主義ドイツ、就中ザクセンとの精神的結合が達成される準備となった。これは本論最終節で再び取り上げる。

「ザクセン人」のアイデンティティに決定的に影響したドイツのザクセン人マルティン・ルター（1483-1546）と、南ドイツでは数少ないルター派地域ヴェルテンベルク生まれのシュヴァーベン人フリードリヒ・フォン・シラー（1759-1805）は、奇しくも11月10日の誕生日を同じくする。それを理由にトランシルヴァニアの1859年のシラー生誕百年祭の諸行事が教会の鐘の音で始まったなどということはない。しかしこの祭典開始が、成員の殆どがルター派の教会に属するザクセン人たちにとって何ら奇異なことではなかったこと、即ちルターとシラー双方が彼らの精神的支柱であったこと、これらを確認することは、「ザクセン人」のアイデンティティの最終的な確立過程を描出するために重要である。

本稿は拙稿『トランシルヴァニアのシラー祭』（Ⅰ～Ⅲ）の前史及び周辺を補完し、ズィーベンビュルゲンの「ザクセン人」のアイデンティティの核である二人の精神的指導者と彼らの最初の接点を提示する試みである。複雑なトランシルヴァニアの歴史については、拙論（1997）の「ルーマニアのドイツ言語語島対照年表」（S. 136-141）を参照願いたい<sup>4)</sup>。

## ルターとズィーベンビュルゲン

現在もズィーベンビュルゲンの「ザクセン人」の殆どが属するルター派教会はA. B. すなわち「アウクスブルクの信仰告白」（das Augsburgische Bekenntnis）をその末尾に付する「アウクスブルク信仰告白に基づくルーマニア福音教会」（Evangelische Kirche A. B. in Rumänien）であり<sup>5)</sup>、この名で世界の福音主義教会の一員となっている。この告白はアウクスブルクでルターの弟子メランヒトン（1497-1560）が起草した「21か条」（1530）の信仰告白（改訂されない信仰告白<sup>6)</sup>）であり、ルターが承認したものである。

アウクスブルクの和議（1555）では、この告白に基づく福音主義教会を信仰する領域の保護が認められ、これが一般にルターの改革の第一次的達成とされる。三十年戦争までの和平が達成されたが、戦争の引き金となる、諸侯にも司教たちにも遵守しがたい以下の諸条項が含まれていたことは指摘するまでもない。これらは後にシラーが『三十年戦史』に余すことなく描いた状況を齎す重大な意味を持った。

- ・旧教とルター派には信仰を理由とする暴力は禁止するが、カルヴァン派その他の新教は異端とみなす。
- ・諸侯の宗教が領邦の宗教となる *cuius regio, eius religio* 「国の持ち主が宗教の持ち主」の原理により、旧教かルター派のどちらかが（皇帝ではなく各領主により）選ばれる領邦教

4) なお、次節以降一般に知られた史的事項に関して、拙稿においては浩瀚なツェルナーのオーストリア史（Zöllner 1990）によるところが大きいので、煩雑を避けるために引用箇所及び頁の指示を省略する。

5) A. B. を末尾に持つルター派教会には、旧教の旧ハプスブルク領を中心に、現在のオーストリア国内、スロバキア、シュレージエンのチェコ領部分、スロベニア、アルザス・ロレーヌなどのドイツ系住民の福音派教会がある。この告白によってアウクスブルク和議の対象となって保全されるべきことを明確にする意味があったのであろう。

6) メランヒトンには、カルヴァンやツヴィングリらとの対話によってさらに推敲した改訂版信仰告白（28条）があるが、これは殆ど用いられなかった（石居訳徳善解説 1979 S. 29）。

会制を承認する。ルター派は1552年のパッサウ条約以降にカトリック教会から獲得した領地を保つ。但し帝国都市は二教併存の現状を維持する。従ってこのような都市からは宗教選択権が奪われる。

- ・司教領主がルター派に改宗する場合、領地を放棄して、旧教教会に返還する「教会領維持」(reservatum ecclesiasticum)の原則<sup>7)</sup>

この当時、トランシルヴァニアは既に基本的にはオスマントルコの支配下<sup>8)</sup>にあり、自治が許されたが、トルコが立てた「侯」(ヴォイヴォド)に属するという変則的な状況にあった。トルコが支配する、神聖ローマ帝国領の枠外にあっても、すでにこの時点で旧教との和議を謳った際にも確認された信仰告白「A. B.」を付して、アウクスブルクの告白と和議を強調した教会が根を下したことは、他の「A. B.」付きのルター派教会同様、本国のルター派教会領域から隔絶されたいわば辺境の潜在的な危機感を反映したものであろう。

トランシルヴァニアでは、カルヴァン派が多いハンガリー人及びセーケイ人との抗争を回避するために、世界に先駆けて個人の信仰の自由が認められていた。トルコ支配地域はアウクスブルク和議の適応外となるから、「ザクセン人」があらゆる教会をルターの福音協会に変えていったように、ハンガリー人を中心にカルヴァン派が何の掣肘も受けずに浸透していた。そして宗教的内紛を回避するため、「ザクセン人」、ハンガリー人、セーケイ人が同数の代表を送り、ラテン語を使用する三民族議会が満場一致とならない限り何事も新たに決まらない原則を確立し<sup>9)</sup>、その上にトランシルヴァニアを領有したトルコが擁立するハンガリー系の「侯」が立つという形態が生まれた。三民族以外の、ルーマニア人のギリシャ正教等の信仰は「黙認」扱いとなった。

1517年の「95か条の意見書」以来、ルターの声は直ちにドイツ世界の隅々にまで伝わる。旧教の干渉の厳しさは周知の事実である。しかしズィーベンビュルゲンにおける宗教改革は、1526年、モハーチの戦いでハンガリーが破れて以来のオスマントルコ支配下の信仰放任政策の下で、極めて平和的に進行した。襖・洪の旧教教会は干渉ができなかった。そしてそこに登場するのが人文主義者、かつルター派の導入者ヨハンネス・ホンテルス(Johannes Honterus または Honter, 1498-1549)である。この人物によって、ズィーベンビュルゲンにおけるルター派福音協会が確固たる地位を固めた。

ズィーベンビュルゲン第二の都市クローンシュタット(現ブラショフ)に活版印刷術を伝え、宇宙図、世界図、ズィーベンビュルゲン図や小冊子を作製し、救貧活動を行って新教の普及に

7) 木村編(2001)の一部に原文ラテン語等を補う形で提示した。

8) ズィーベンビュルゲンの宗主権は、「ハンガリー王の客人」としてドイツ人が現ルクセンブルクとその近郊を中心とする地域から入植を始めた1141年からモハーチの戦い(1526)までのハンガリー時代、以後オスマントルコの第2回ウィーン包囲失敗(1683)までのオスマントルコ支配時代、以後アウスグライヒによる二重帝国成立までのハプスブルク支配時代、以後第一次世界大戦の戦後処理を決定したトリアノン条約によりルーマニアの版図に入る(1920)までの二重帝国下ハンガリー支配時代、それ以降のルーマニア支配時代に分かれるが、ハンガリー支配時代には君主の婚姻によりハプスブルクの版図とされた時代など、複雑な宗主権の交代もあった。

9) 民主主義的に見えるこの議会はあくまでも妥協の産物であり、この議会に代表を送った「ザクセン人」の自治組織、ユニベルジテート(Universität)は総合大学ではなく、自治共同体の意味である。(Nationsuniversitätとも)。この組織は、1224年から形を変えつつもナチス時代に至る長い歴史をもつ(鈴木1997年表参照)。16～17世紀には常に少数の有力な家系に牛耳られていた(Daugoch S. 180-216参照)。トランシルヴァニア侯バートリ・イシュトヴァーン(Istvan Bathory 1533-1588)はこの議会の議決に従い、1557年と1664年に信仰自由令を発令し、三民族以外の人々の信仰は「不問」という形で、あらゆる人の信仰の自由が確定した。

努め、かつ現在もホンテルスギュムナージウム (Honterusgymnasium) として存続する名門校<sup>10)</sup>を1541年に創立したのが、このホンテルスである。彼を題材とした唯一の戯曲『ヨハンネス・ホンテルス』三幕劇 (Teutsch 1897) の作者、クローンシュタットの作家トラウゴット・トイチュ (1829-1913) は、「戦と抗戦はあらゆるドラマの構成の本質である。だがズーベンビュルゲンでは宗教改革が総じて平和的に実施された。そしてまさにそれ故に、歴史は劇作家に対して使うに足る決定的な要素を極めて僅かしか提供してくれない。」(ibid. Vorwort) と述べ、史実に反した人物配置の必要があったことを明かす。

ホンテルスはウィーン大学で学ぶが、トルコ軍のウィーン包囲 (1529) を避け、おそらく彼が新教を受容したレーゲンスブルクや、クラクフなどに遊学する。活版印刷に手を染めたホンテルスは、故郷に戻って多方面で活躍し、上述の印刷物が知られる。ゲルノート・ヌスベッヒャーによれば、ホンテルスが自分の印刷所から出版した『クローンシュタットとブルツェンラントのための宗教改革小冊子』(ラテン語、1543) は「マルティン・ルター、フィリップ・メランヒトン、ヨハンネス・ブーゲンハーゲンといったドイツの宗教改革者たちから歓迎と高評価を受け、ルターの高弟メランヒトンはホンテルスの出版と同じ1543年にこの書に自分の序文を付けて新版を出版し、同年の書簡でオスマントルコによる危機との戦いにおける道徳的拠り所として宗教改革の積極的意義を強調した」(Nussbächer 1978 S.83) 由。

そして同年、ズーベンビュルゲンの首都格ヘルマンシュタットの市参事会がこの『小冊子』のドイツ語訳を完成し、それを市教区牧師がルター、メランヒトン、ブーゲンハーゲンに送り、市の教会改革への意見を求めた。ルターは「汝が予に尋ねたことはすべて、予が書きうるよりもかの小冊子において見出すことができよう。かくも大なる博識、純潔、忠節によって書かれた書が、いかに我が意に適っていることか！」と返答した。これによって、遅くとも1524年に開始していたとされるこの都市の宗教改革はクローンシュタットの前例に従って改めて着手された (以上 ibid. S.95)。1544年、クローンシュタット市議会は市当局と若干の軋轢があったホンテルスを市の福音主義教会の牧師に任命し、ホンテルスもルターと書簡の交換を繰り返した末に受諾する<sup>11)</sup> (K. K. Klein S. 278)。

福音主義がズーベンビュルゲン全体に浸透した陰には、ホンテルスの多面的な活躍があった。ヌスベッヒャーによる『小冊子』の概要 (Nussbächer 1978 S. 79-83) によれば、教会のしもべ (聖職者) がキリスト教の教義に精通しているかどうかの検査法が探求されるべきであった。洗礼に関してはクローンシュタットの改革はヴィッテンベルクの教会法に準拠された。礼拝にはドイツ語が用いられた。聖餐の際には両形色の聖体拝領が行われ、同様に「使徒書簡朗読の後に時折ドイツ語の歌を使用すること、聖書に反するものでなければ習慣に従って別の言語を用いることを除けば、元の教会が守ったものを何も変えない」(ibid. S.81) という原則に従って、いくつかのラテン語礼式が取り除かれた。『小冊子』では、公的資金による学校の設立を特に重要とする章と、貧困者の保護の実現を説く章が加わる。この二章は、人文主義者ホンテルスの面目躍如というべきだが、ルターはこの『小冊子』全体を称賛したのである (以上 ibid S. 82f)。

10) キリエンらによれば「多くのクローンシュタット市民にとって学校といえばホンテルス校であり、その生徒であるだけでも何か特別なことであった。多くの教師にとってもホンテルス校という組織は並外れた学校であった。」(Killyen u.a. Hrsg. 1998 S.7)

11) K. K. クラインの指摘のように、ホンテルスは「最初から宗教改革者ではなかった。人文 (人道) 主義的学者であり、教育者であった」(K. K. Klein 1935 S. 290) というべきか。市当局との厳しいやり取りは、彼のこの姿勢によるものであった。

福音主義はズィーベンビュルゲンにおいて長く絶対であり、様々な国の宗主権の時代を通じて、一般の人々は教師と牧師の指示に盲目的に従属し、ナチズムの導入に至るまでもそれは不変であった。かつてのシラー祭の高揚もその結果であり、本国ザクセンの大学でナチズムの洗礼を受けた若い牧師と、ホンテルスが作った人文主義的な学校の末裔、大学を持たなかったズィーベンビュルゲンの最高学府であったホンテルス校の若い教師たちに従ってヒトラーと共に戦ったのも（鈴木 2019 S.6 参照）、同様の状況によるものであった。「ザクセン人」の行く末について議論が戦わされるのは、牧師を含む知識階級の人々の間のみのことであった。

「ザクセン人」の間に国家社会主義が浸透し、ルーマニア政府もそれを黙認していた 1938 年からは、教会が自治体の所管であるべき公文書館も兼ねることになり、古文書をはじめ、「ザクセン人」の戸籍・不動産に係る書類まで一括して教会の管理下に入った。これらのうちの貴重な古文書が最終的に篡奪的に国の公文書館に移管されるのは共産党時代の 1957 年のことである（Vlaicu 1996 S. 69, 76）。しかしたとえばヘルマンシュタット（シビウ）の教会教区立「トイッチュハウス」にある公文書館は、死守し得た少数の古文書とともに、現在も「ザクセン人」のかつての戸籍・不動産の登記書類をも管理しており、すでにドイツに「帰還」した人など、古い登記書類を求める人々が今も訪れている。

### シラーが描いたズィーベンビュルゲン

近代ドイツ語の礎であるルター訳新約聖書と共に、そのドイツ語を磨きあげたゲーテとシラーの作品は、ズィーベンビュルゲンの支配階級を育てたギュムナージウムでも第二次大戦終了前の教育の基礎をなした。そして当地で世界市民ゲーテよりもシラーが選ばれたことは拙稿『トランシルヴァニアのシラー祭』（Ⅰ～Ⅲ）で示した。

先に示したように（鈴木 2018, 19, 20）、「ザクセン人」が近代のドイツ人と一体化される過程におけるシラーとシラー祭の役割は、当地の最初のシラー祭、生誕百年祭ドイツ各地と共に祝って以来、彼らが国家社会主義を受け入れた時代のナチス主導の 1934 年の生誕 175 年祭まで極めて重要であったが、シラーの作品にも、その事態を準備するに足る影響力があった。彼らとシラーとの関係は、1859 年のシラー祭に始まるものではない。シラーの文学を中心とする作品はギュムナージウムのみならず、あらゆる学校で教授され、暗唱されていた<sup>12)</sup>。本節は、これまで本研究が触れなかったシラーからズィーベンビュルゲンを見る試みである。

シラーの作品中に直接見えるズィーベンビュルゲンの記述は、『三十年戦史』（1790-92）におけるものがおそらくすべてであろう。この史書の中でズィーベンビュルゲン<sup>13)</sup>は 24 回、トルコが任命したハンガリー人の「トランシルヴァニア侯」ベトレン（姓）・ガーボル（名）（Bethlen Gábor）が同じく 24 回、そしてその後継者ラーコーツィが 4 回登場する<sup>14)</sup>。ベトレンとラーコーツィ（Rákóczy）の名が現れるのは、彼らがトランシルヴァニア侯としてヨーロッパ東部、即ちトランシルヴァニアより西で参戦したことによる。シラーにとってのこの史書の中核、即ち高邁な理想に従うスウェーデン王グスタフ・アードルフと、只管成り上がる田舎貴族の傭兵隊長ヴァレンシュタインの対立を中心に戯曲化した『ヴァレンシュタイン』三部作では、ズィー

12) 本稿では省略するが、整然と保管されているギュムナージウムの講義題目等から容易にそれは確認できる。

13) シラーはズィーベンビュルゲンを含むハンガリーとセーケイ人地域を含めたトランシルヴァニア全体にこの言葉をあてる。

14) カウントには、Projekt Gutenberg 版のテキストを用いた。（2022 年 8 月 30 日閲覧）

ベンビュルゲンは舞台とならず、言及もされなかった<sup>15)</sup>。ヴァレンシュタインは当地までは軍を率いて来なかったのである。しかし筆者が初めて『三十年戦史』に触れた翻訳の冒頭「解説」に以下の一節を見出し、共感、納得しながらも、シラーを既成宗教の枠に入れることの妥当性に疑念を抱いたことが、ヴァレンシュタインの名を見聞きするたび心中によみがえる。筆者は岩波文庫（渡辺訳 1943, 44）の、45 年ぶりに復刊された第 2 刷（1988）でこの解説に接した。

『三十年戦史』を読みつつ感じたことは、シルレルは新教徒であらう、と私の胸中に推測したことであった。それはグスタフ・アードルフが新教を代表して皇帝軍と戦ふとき、自由のための闘争に殉ずる純潔なる、高貴なる心情の持主として叙述し、ヴァレンシュタインを描くに当つては、自己の栄達を図らんがために皇帝を利用し、そして信教を抑圧する専横傲岸なる將軍として見てゐるからである。（渡辺訳解説 S.7）

この感想は、歴史研究の場では決して安易に吐露されるべきものではなかろう<sup>16)</sup>。しかし文学に関わる訳者として述べるならば、極めて自然なものだとも思われる<sup>17)</sup>。シラーがヴァレンシュタインの死を描く際に急に彼を持ち上げ、

かくしてヴァレンシュタインは、五十の歳を生きて豊かで並外れた人生を終えた。野心によって高みに上り、功名心によって転落した。あらゆる欠点をもってしても依然として偉大で称賛に値する。則を超えなかったならば比類のない人物であったであろう。

と述べた後、第 2 部第 4 巻を、有名な

ヴァレンシュタインはかくのごとく斃れたが、それは反逆者だったからではなく、斃れたことで反逆者とされたのだ。生者にとっての不幸は彼が勝者の軍を敵に回したこと。そして死者にとっての不幸はこの敵が生き延びて彼の歴史を書いたことであった。

という言葉で閉じた後、彼は突如筆を急がせ、第 2 部第 5 巻で作品を閉じてしまう。彼の戯曲もヴァレンシュタインの死が近づくにつれ、その心中を、（この箇所のみでは）同情をもって

15) 但し、ヴァレンシュタインの軍に随行してテントで酒を売る女主人（Marketenderin 則ち従軍商人）の言葉（第一部 第五場）「輜重車に乗ってテメスヴァールの果てまで遙々行つたさ。敵方のマンスフェルトを追撃してね。フリートラントの殿様の軍とシュトラールズントの手前にもいた。そこじゃすっからかんになっちゃった。援軍についてマントパにも行つたけど、フェリアの軍と一緒に抜け出した」（Schiller 1799 s. 25）云々とあり、転戦の凄まじさと共に、ドイツ世界の外側を回ったことを滔々と語るのだが、その東の端が、現在のルーマニアではトランシルヴァニアの一部とされる最西端の町テメスヴァール、則ち 1989 年チャウシェスクが倒されたクリスマス革命の烽火を最初にあげた町ティミショアラであった。しかしこの町は「ザクセン人」地域には入らず、ゾーベンビュルゲンともいえない。当地は後にオーストリアが入植を進めたドナウ川沿いのバナートと呼ばれる地域に属する。因みにネーデルランド総督の庶子マンスフェルトは新教側の傭兵隊長。ヴァレンシュタインに追われ、一時ゾーベンビュルゲンで匿われた。

16) シラー自身の信仰について、喧しい議論が繰り返されている。筆者はヴィーゼの「シラーは合理主義的無神論者とはいえないが、プロテスタントと呼ぶこともできない」（Wiese 1960 S. 406）という有名な見解が今も妥当性を失っていないと考えている。

17) 『三十年戦史』が膨大な文献を背景にしているのは明らかだが、史料も二次文献も一切提示していない。その意味で、これは現代的な学術的文献とはいえない。だが歴史小説でもない。

細かく描いた後、間もなく幕を下ろす。それだけ、旧教と新教を軸にした諸侯の陣取り合戦をこの2人物に負わせて描いたのである。そして渡辺と同じ感想は『ヴァレンシュタイン』三部作を読む際にも、全く自然に（おそらくドイツ人のみならず誰が読んでも）持つことになるであろう<sup>18)</sup>。

かかる戦史の中に、戦場でない辺境の新教地域ズィーベンビュルゲンが珍しく多数回現れること、これがズィーベンビュルゲンの福音主義教会の信徒「ザクセン人」に響かないはずがないと考えること、そしてズィーベンビュルゲンがドイツ世界において、「高潔な」スウェーデン王グスタフ・アードルフ（2世、在位 1611-1632）を代表とするルター派勢力と共に語られることは「ザクセン人」とドイツの福音主義諸国との精神的距離を近付けるものである、と（短絡的に）結論すること、これらを許すには、シラーの筆はあまりにも冷徹で分析的ではある。トイチュの言のように、ズィーベンビュルゲンにおける新教の浸透はズィーベンビュルゲン内部で実に抵抗なく完遂された。しかしそれを許すこととなったトルコの支配とパラレルに、宗教、貴族の野心、王権の入り混じった狂乱の事態がトランシルヴァニアをも襲っていた。以下少々紙数を費やして、シラーの『三十年戦史』第1部第1巻における、その戦争の前史としてのトランシルヴァニア記述の中心部分を引くことによって、シラーの筆捌きを確認する。

ハプスブルク家の世襲領の中で、ハンガリーはトランシルヴァニアとともに、最も不安定で領有を維持するのが難しい土地だった。迫りくるトルコ人の優れた兵力に対してこれら二地域の領有を主張することは無理であり、フェルディナント（注：神聖ローマ帝国皇帝。在位 1556 - 1564）は既に、年貢でトランシルヴァニアに対する最高の主権を門（注：高い門、即ちオスマントルコの外交部高官府）に認めるという恥も面目もない一歩<sup>19)</sup>を踏み出すことしかできなかった。それは無力さを曝す有害な告白であり、不平を煽らせる貴族にとって、彼がその主人に不平を言う責任があると信じているとすれば、さらに危険な刺激となった。ハンガリー人は必ずしも（訳注：首長の婚姻によって偶々領有権を得た）ハプスブルク家に服従していなかった。彼らは自らの王冠の選択の自由を主張し、この選択の自由と不可分であるすべての財産権を頑なに要求した。トルコ帝国と隣り合っていることは、彼らが領主を、処罰されることなく変えることが容易であることと相俟って、この頑な姿勢をさらに強めた。オーストリア政府に不満を抱いた彼らは、オスマン帝国の腕の中に身を投じた。それに満足しなくなると、ドイツ（注：オーストリア）の主権の下に戻った。一つの権力から別の権力への頻繁かつ迅速な移行も、彼らの考え方の一部であった。自分の国がドイツとオスマン帝国の主権の間を行き来するにつれて、彼らの感覚も背教と服従の間で変動した。（中略）意欲に満ち溢れた次の<sup>20)</sup>トルコのパシャは、オーストリアの王笏と王冠を反逆者に渡し、オーストリアも喜んで反逆者が門から奪った地方の所有を承認し、主権の影だけは救えたこと、

18) 1800年、この作品はワイマールで初演され、間もなくプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世夫妻が観劇に訪れる。ベルリンでは『ヴァレンシュタインの陣営』を除いて上演されるが（1803）、旧教のウィーンでは検閲で上演できなかった。なお、シラーが生まれたヴェルテンベルク公国は、16世紀後半以来基本的にはルター派を信奉した。

19) 1556年にトランシルヴァニアでトルコ軍の攻撃が失敗したが、その時点でのわずかな占領地を認めることを条件に、それ以来「コンスタンティノーブル条約（1562）以降「名誉の贈物」を毎年支払うことを条件に、オーストリアはトルコにトランシルヴァニアの宗主権を認めた。（Zöllner 1990 S. 256）

20) アフメド1世自身を指すものか。

それによってトルコ人に対する擁壁を得ることに満足した。バトーリ、ボシュカイ、ラーコーツィ、ベトレンなど、数人のこうした大貴族がトランシルヴァニアとハンガリーで次々税を徴収する王として君臨することになったが、それは彼らが自分の君主にとってさらに恐るべき者になるために敵と結ぶという政策によるものであった。(Schiller 1891 S. 24 f.)

1526年のモハーチの戦いでハンガリー・ハプスブルク連合軍がオスマントルコ軍に敗れて以来、トランシルヴァニアは基本的にトルコの宗主権の下にあった。オーストリアは度々この地を奪うのだが、間もなく取り返されるということが繰り返された。シラーのこの記述は、ズィーベンピュルゲンの「ザクセン人」ではなく、神聖ローマ皇帝とトランシルヴァニアの侯たちの振舞いであることに注意すべきである。そして侯たちにとって「王冠」は容易に覆しうるものであり、その時々で便利に利用したものにすぎないことが簡潔に示されているのである。さらにシラーは続ける。

トランシルヴァニアとハンガリーの(注: 首長同士の婚姻によって得た形式的)支配者、オーストリアのフェルディナント、マクシミリアン(2世、在位1564 - 1576)、ルドルフ(2世、在位1576 - 1612)の神聖ローマ皇帝はいずれも、トルコ人の侵入とこれらの地域の反乱に対してその地の領有を主張するため、支配下の他の国々を完全に疲弊させた。この領域における壊滅的な戦争と、それよりもむしろとも言えない短い停戦とが交互にあった。土地は広く荒廃し果て、虐待された臣民は敵方にも彼の守護者に対しても同じく大きな不満を抱いた。宗教改革はまた、この国々にも侵入し、動乱の陰で、身分制議会の自由の保護の下、目覚ましい進歩を遂げた。それに対してもまた、今や軽率に干渉がなされ<sup>21)</sup>、政治的党派性は宗教的陶醉によっていっそう危険に曝された。トランシルヴァニアとハンガリーの貴族は、大胆不敵な反逆者ボシュカイに率いられ、反旗を翻す。ハンガリーの反乱軍は、オーストリア、モラヴィア、ボヘミアの不満を抱いた福音派と共に、恐ろしい反乱でこの国々を引き裂こうとしていた。こうなると、オーストリア家の没落は確実であり、この国々における教皇庁の没落は不可避であった。(ibid. S. 25 f. 以上鈴木試訳。太字は鈴木。)

強大な戦力を誇っていたオスマントルコを前に、オーストリアが消耗戦の中でも伸ばそうとした東への主権の拡張は、あっさり否定される。そしてトルコの門に従う侯の下、トランシルヴァニアでは「ザクセン人」のルター派と、ハンガリー及びセーケイ人のカルヴァン派が何の干渉も受けずに勢力を伸ばしていったことが確認されているのである。

因みに14～17世紀のズィーベンピュルゲンでは、既存の教会の周囲に丸く分厚い擁壁を巡らせ、壁の中に居住区、学校、ワイン醸造所などまで用意してトルコ軍との長期戦に耐える「要塞教会」が多数作られた。その周囲はシラーが述べるように荒廃に任せるしかなかった。要塞教会は今日のズィーベンピュルゲンにも多く残されており、シラーの言を今も証言し続けている。2番目の太字部分「ハンガリーの反乱軍は、オーストリア、モラヴィア、ボヘミアの不満

21) 1602年、オーストリアが混沌とした戦況の中でトルコに勝つと、アウクスブルクの和議などなかったかのように新教の弾圧を始めた。そのため、それまでオーストリア皇帝を支持していた「ザクセン人」が皇帝に背く。イシュトバン・ボシュカイがトランシルヴァニア侯に選ばれ、トルコ側についた。(Zöllner 1990 S. 261 参照)

を抱いた福音派と共に」は、実はこの当時、ルターのドイツ語訳聖書を基にオーストリアの市民の中に、急速に新教が浸透していたことを淡々と示しているのである。

しかしシラーは、上述のヌスベツヒャーの言中のホンテルスのように「トルコによる危機との戦いにおける道徳的拠り所として宗教改革の積極的意義を強調」はしない。彼が描いたのは概ねハプスブルクとパシャとハンガリー人貴族との間の力学と宗教の複雑な絡み合いであった。但し、三十年戦争当時のハプスブルク家の軍事的・政治的脆弱さと、最初の太字で示した部分、則ち大局的には宗教改革の伝播がトランシルヴァニアをも不安定にしたことが正確に描かれており、その最中にも、ユニヴェルジテートの自治は失われず、結果的に三民族会議における「ザクセン人」の位置が保全されたのは、トルコの占領地内部への不干渉政策であったことを明示する。シラーの「宗教改革はまた、これらの国々にも侵入し、動乱の陰で、身分制議会（これは三民族会議を指す）に対する自由の保護の下、目覚ましい進歩を遂げた」という記述自体は正しい。当時のハプスブルクが東欧における拡大政策への反抗にいかん手を焼いていたのかに対する、的確かつ簡潔な記述である。オスマントルコの支配時代といえども、ハプスブルクがいかに虎視眈々とこの地を狙っており、断続的に成功を得ていたことを示す的確な記述でもある。トランシルヴァニアにおけるオーストリアの主権回復が完全に実現するのはオスマントルコの第2回ウィーン包囲が失敗（1683）してからである。

他ならぬシラーのこうした詳細な分析に基づく記述を重ねる史書が、先述のように、ズィーベンビュルゲンをドイツ世界において「高潔な」スウェーデン王グスタフ・アドルフを代表とするルター派勢力と共に語ることによって、「ザクセン人」とドイツの福音主義諸国との精神的距離を縮めたであろうといわざるを得ない。彼らのアイデンティティがここに確認されているのである。これが「ザクセン人」の胸中に何らの反応も喚起しないと考えるのは難しい。シラーは生前からズィーベンビュルゲンと共にあったと彼らは納得し、「ドイツ国民」と共にルターとシラーの祭を祝うことになる。

当地でハプスブルクの主権が確定するのは上述の第2次ウィーン包囲失敗（1683）の後だが、オーストリア政府は、ギリシャ正教をはじめとする多彩な宗教地図が描かれるこの世界に対して、頭から旧教の無理強いはできなかった。ヘルマンシュタットのシラー生誕百年祭（1859）が教会の鐘の音で始まったことは、何ら不思議ではないことが理解できよう。

ハイデルベルクのコンツェ教授のかつての指摘のように、「シラーが名付けたドイツ人の『精神の王国』は、フランス革命の原理が、世界を揺るがす武装した膨張に置き換わった時、ナポレオンがドイツとヨーロッパを支配しようとした時、そして古い帝国が崩壊してヨーロッパの諸国民の自由がフランスの支配に隷属する「自由」に対置された時、政治化した。それと共に近代ドイツの民族主義が成立した。1789年から1813年に至るまでの政治的事件によって、それは解き放たれた。しかしそれに先駆けた国民的精神運動（注：ルターの改革）なしにはありえなかった」（Conze 1985 S. 145 f.）のである。三十年戦争でルター派が地盤を固めたのは北欧と北ドイツを中心とするザクセンを含むドイツであった。当然ズィーベンビュルゲンは、オーストリアや南独の旧教諸邦ではなく、北独（プロイセン）との連帯を深めた。それを象徴的に確認させたのが「ズィーベンビュルゲンのシラー祭」なのである。最後にフランス革命以降、ドイツ成立にかけての当地とドイツ世界とルター及びシラーについて考察を進める。

## シラー祭の多様性 ルターとシラーとズーベンビュルゲン

近代ズーベンビュルゲンの指導的階級であった牧師またはギムナジウムの教師となるべく、良家の子息が遊学したのはザクセンの大学、就中今日フリードリヒ・シラー大学イエーナ (Friedrich-Schiller-Universität Jena) と称する大学 (1558 創立) であった。そしてルターやメランヒトンが拠って改革の拠点としたヴィッテンベルク大学 (1502 年創設) は、1817 年にハレ大学 (1694 年設立) と合併し、現在マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク (Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg) となっている。いずれもズーベンビュルゲンの「ザクセン人」を多く迎えた。イエーナではシラーが私講師として教鞭をとり、三十年戦史を講じて人気を博した。そしてルターが頻繁に説教したヴァイマルには、後年ゲーテがシラーを宮廷劇場の顧問として招いていた。時代は異なるが、ザクセンの狭い地域の中でルターもシラーも生産的に活動した。因みにドイツの大学が国家社会主義の温床であった時代には、故郷に戻って指導的地位についたザクセンへの留学生が「ザクセン人」の社会にそれを不可逆的なまでに導入し、民衆はそれに盲目的に追随したことは先に述べた (鈴木 2019 S. 7-11)。

ナポレオン戦争の後処理のためのウィーン会議議定書 (1815) により、戦時中 300 余の小邦が 38 にまで整理されたドイツ諸邦の状況が追認され、その中でプロイセン、またはオーストリアまたは両者を中心とするドイツ統一による近代国家樹立の要求が不可逆的に高まり、オーストリアを含めるドイツを望む大ドイツ主義と、含めない小ドイツ主義が次第に鋭く対立する。

ウィーン会議後、自由主義勢力が強いバイエルンでは、その行き過ぎを嫌う当局がメディア統制に走っていた。しかし民衆が集まる祭典を規制することはなかった。事実、当時のバイエルン王国領プファルツでは 1832 年に「ハンバッハ祭 (Hambacher Fest、ドイツ 5 月祭)」が開催され、丘の上の古城ハンバッハに数万の市民が集まり「民族の祭典」を祝った。そこで自由主義が鼓舞されたが、当局は阻止できなかった。ここでは配列こそ違うが、現在のドイツ国旗と同じ金・赤・黒の旗が自由主義の象徴となった。

三月革命の最中 1848 年、自由主義を基調に設立されたドイツ諸国のフランクフルト国民議会はプロイセン王を皇帝に推挙するものの、王ヴィルヘルム 1 世は国内のナショナリズムを尊重して自由主義を嫌い、拒絶する。革命が終息し、1849 年のオーストリア欽定三月憲法によって多民族国家オーストリアの形態が復旧すると、大ドイツは決定的に遠のく。1866 年の普墺戦争ではプロイセンが勝利、オーストリアとバイエルンは敗北する。これによりそれまではなす術がなかったドイツ諸国の統一に対する機運が高まり、結局自由主義ならぬビスマルクの鉄血主義によるドイツ統一が 1871 年に成り、バイエルンなど南部ドイツもその勢力圏に入る。ヨーロッパ以外に北米でも祝われたシラー生誕百年祭は革命とドイツ統一の中間、1859 年に位置し、三月革命以降の反動の時代が、もはやメディアの規制ができない程の熱をもって「統一」の時代に転換したことを示す。

1859 年のシラー祭をメディアが導いた産物だとする Th. ロッケは、ドイツのみならず欧米各地の政治的影響力が大きい大都市のシラー祭を徹底的に調査<sup>22)</sup> し、この祭典が 1848 年の自由

22) 彼の分析の対象となった都市と新聞の紙数 (その他の文献を除く) を挙げれば、アウクスブルク (1)、ウィーン (7)、シュトゥットガルト (5)、ハノーファー (1)、ハンブルク (7)、フランクフルト (1)、ベルリン (12)、ミュンヘン (3)、ライプツィヒ (2)、ヨーロッパではロンドン (6)、パリ (4)、アメリカではシンシナチ (7)、セントルイス (5)、ニューヨーク (9)、ピッツバーグ (10)、フィラデルフィア (11)、ミルウォーキー (4) である。東部が多いのは、三月革命を主導して敗北し、逃れた人々がそれぞれの都市で自由を求める論陣を張り、シラー祭を主導したからである。ロッケが全く触れないドイツ語地域とズーベンビュルゲンの状況は鈴木 (2018) を参照されたい。

主義的な革命家の残党と民族運動の支持者が主体の祝祭委員会を中心に開催されたとし、統一の機運の中の新聞等のメディアがその中心であり、「民族はメディア現象である」という結論を導く。さらに詩人シラーと「ドイツ民族」の記憶文化的解釈（垂直、即ち通時的な網目）と共に水平な網目が、シラー祭を祝う人々に被せられた。「新聞における祝祭の演説と解説記事・論評や祝祭の資料とは異なり、祝祭のレポート記事による、シラー祭を祝う（共時的な）水平の網目では民族は明示的には語られず、「民族」が事実確認的なものであると誤読された報道記事において、むしろ暗示的に行為共同体として現れ、それどころか作られていたのである」（鈴木 2018 S. 31 f. 参照）と述べる。一方、ズィーベンビュルゲンの首都格ヘルマンシュタット（シビウ）のシラー祭は、祝祭委員会と新聞が誘導したが、侯から市民に至るまで、あらゆる階級が参加して共に祝ったことが非常に大きな特徴である（ibid. S. 32-34）。そして新聞は、シラー祭のズィーベンビュルゲン各地の都市における熱狂的な様相を報告する（ibid. S.35）。

スイスでは『ヴィルヘルム・テル』のシラーが祝われ、そこで提示されたのは当然独立の象徴としてのシラーの生誕であった。三月革命の後自由を求めてアメリカに逃れて論陣を張る人々の努力は、ロッゲが調査したアメリカの各都市の紙数の多さが示している。ズィーベンビュルゲンのシラー生誕百年祭の状況を詳細に調査した後では、彼が扱わない当地のシラー祭においても彼のに異論を差し挟むことは難しい（ibid. S. 30-32）。

福音主義を前提とし、教会の鐘の音で始まるズィーベンビュルゲンのシラー祭が、ザクセンを含むプロイセン主導の小ドイツ主義的統一ドイツの一部として確たる位置を占めることを期して進行したのは疑いない。そして当地の歴史はその通りに動いた。多数のシラー祭の些細な一つに過ぎないズィーベンビュルゲンのシラー祭は、「ルター・シラー祭」なのである<sup>23)</sup>。主要ドイツ語圏におけるものと同時にシラー祭を祝ったことは、彼らと本国、即ちまだ成立していない小ドイツ主義ドイツとの精神的結合が達成される準備となった。

1859 年、ベルリンやウィーンをはじめドイツ語地域の殆どあらゆる都市のみならず、1848 年の革命を戦って敗れた自由主義者が多く逃れた北米東部の都市のほか、ロンドンやパリでも祝われ、「民族」形成に大きく貢献したシラー祭そのものには、イデオロギーに拘束された明確なベクトルのようなものはなかった。ロッゲの指摘のように、メディアごとにそれぞれに作られたものであった。しかしその総体としての「気運」には、明らかに「民族」への志向とドイツ統一を目指す基調があった。

ドイツ語圏の各都市及び国外に逃亡した三月革命の闘士らによるシラー祭の論調の差異を示す一例として、ルターと誕生日を同じくする三人目の人物、殆ど注目されない革命家ローベルト・ブルーム<sup>24)</sup>（Robert Blum, 1807-1848）の扱いをロッゲの分析から挙げる。実はブルームこそ、1840 年に初めて、自由主義の象徴としてシラーを称えるシラー生誕祭を、プロイセンのライプツィヒで始めた人物であった。革命の大立者ではないが、人気があった。ここで新教のルター

23) 事実、ズィーベンビュルゲンのルター派教会は、細々とではあるが 11 月 10 日を「ルター・シラー祭」として祝っている（鈴木 2020 S. 23 参照）

24) 民主主義者であり、民族主義を批判。旧教支持の元劇団職員、フリーメーソン。反ユダヤ主義を批判。人権論者。ライプツィヒでシラー協会（Schillerverein）を創設、シラーの故郷以外では初めての、（政治性を帯びた）シラー祭生誕記念祭を 1840 年に開催する。1839 年ザクセンの自由主義者のリーダーとなる。1848 年、国民議会議員となって革命を支持する。革命支援のために向かったウィーンで、同年 11 月 9 日銃殺される。Angermann, Erich, "Blum, Robert" in: Neue Deutsche Biographie 2 (1955), S. 322-324 [Online-Version]; URL: <https://www.deutsche-biographie.de/pnd118511947.html#ndbcontent> による。2022 年 9 月 30 日閲覧。

と旧教の自由主義者ブルームの扱いを検討し、シラー祭の多様性を観察してみる。

ベルリンでは市長クラウスニクの祝辞が新教プロイセンという文脈の中でルターに触れる (S.55)。ハンプルクではルターとシラーの生誕を祝う礼拝用品が店に並べられる (S.120)。これらはゾーベンビュルゲンと結ばれるプロイセンでは当然の事象である。

旧教地域ミュンヘンではシラー祭を「王の目に刺さった棘」として「国民の祭典ではなく芸術家の祭り」に押しとどめようとする教会の声に呼応する動きが強かった。「国民の使者」紙 (*Volksbote für den Bürger und Landmann*) は、教会がシラー祭に鐘を鳴らすこと<sup>25)</sup>、ルターの讃美歌『我らの神は堅固なる城』を意図的に全曲歌い通すこと、シラー像を教会に建てることは問題で、度を過ぎたものだとした。この新聞はそれに加えてブルームが射殺された記念日 (11月9日) と、彼のシラーへの関わりを書き、そこにシラー祭の企画委員会と祭りを祝う人々のラジカリズムを含意させた (S.182)。これは逆に、ミュンヘンでもシラー祭を祝い、「統一」を支持する人々が多数いたことを教える。

ウィーンでも実はシラー祭は盛大に祝われたが、ロッゲは残念ながら当地のルターとブルームに関する記事を見出していない。

ロンドンでは詩人・自由主義者で革命の際刑務所から脱走したゴットフリート・キンケル (Gottfried Kinkel) が水晶宮における祝辞でシラーと並べてルターとブルームに触れる (S.198 f.)。

北米東岸では、三月革命を逃れた自由主義の論客が祭典を利用して同質の論陣を張ったので、例を限定する。フィラデルフィアではフリーメーソンのシラーの名を冠したロッジ (支部) がシラー祭においてブルームを称えた他、ルターとシラーの誕生日を掲げる横断幕も (1つのみながら) あり (S.241 f.)、ルターとレッシングと並べて現代ドイツ語の創造者としてシラーの名を挙げる演説があった (S.245)。

ニューヨークではルターとブルームの同じ誕生日が祝われ、ブルームが近年の自由と独立のための闘争の中で国民詩人シラーを世に広め、自由の闘士として仆れたことが強調される (S.282 f.)。フランクフルト議会の議員ヴィルヘルム・レーベ (Wilhelm Löwe) はルターの伝統と革命の文脈でシラーを称えた (S.284)。古くからの新教新聞「ルターのヘロルド」紙は「最大にして真の自由思想家は決してシラーではなくマルティン・ルターである。むしろシラーはルターと宗教改革に全てを負っており、信心深い両親の家が彼の人生を形成した」と書く (S.289)。

セントルイスでは体育協会ホールでシラーの肖像にブルーム、ゲーテ、フンボルト、レッシング、ヴィーランド、ベルネとハイネ、続けて二人ずつ並べてルソーとヴォルテール、ウルリヒ・フォン・フッテンとマルティン・ルター、トーマス・ペインとパトリック・ヘンリーの名を記した横断幕が並んだ。「ポスト」紙は祭典の直前にルターとブルームの誕生日も同じであることを指摘した (S.359)。

北米のシラー祭に関する記述を結ぶロッゲは、アメリカの亡命ドイツ人らにとって「(ドイツの) 没落の原因は不和と弱小国家の乱立、領主の専横、そして部分的には教会の影響力行使にその責任があった。この観点では教会と領主が内なる敵で、フランスがドイツ民族の外敵だったが、教会への批判は主に旧教に向けられ、ルターはシラーの精神的な父であり、シラーはその改革の完成者であった」(S.382) こと、そして「シラー祭はドイツとアメリカの関係において連帯を強調し、自らがドイツ社会に所属すべきことを求め、別のエスニック社会に対して、

25) ズーベンビュルゲンで教会の鐘の音と共に祭典が開始されたことは序でも述べた。各都市のルター祭の中心となったドレスデンシラー基金がこれを基本とするべく指示したのだろう。

自らを対抗集団として知らしめ、主張するための機会とみられた」(S.383)とも述べ、必然ともみえる結論を確認した。ただし、以上によって各地の、そして各国のシラー祭がいかにも別なもの(宗教、自由主義)、そして同じもの(民族、統一)を目指していたかが、シラー・ルター・ブルームの描かれ方によって明確に浮彫りになった。

ドイツ統一達成の直前、1859年のシラー祭にその機運の醸成が託されたのは明らかで、これがズィーベンビュルゲンの「ザクセン人」たちの自己規定の働きも果たしたことは疑いない(鈴木 2018, 19, 20)。ただし彼らの祭典の中でブルームが賞賛されたことはない。このシラー祭のズィーベンビュルゲンにおける意味自体は、プロイセンの基調と大差ない。しかし拙論は同じズィーベンビュルゲンの、後の各時期のシラー祭の意味が異なっていたことも示した。1859年の生誕100年祭はザクセンを介した小ドイツ主義との連帯を求め、松明行進を行うものであった。1906年の没後百年祭は、二重帝国下の「ハンガリー化」に抵抗することもならず、小声ですでに精神的統一が成ったドイツとの連帯を確認した(鈴木 2019)。そして1934年のナチス主導の「生誕175年祭」、即ち「ヒトラーの戦友としてのシラー」を記念する祭典の際には、ナチスと共に戦争準備に力が注がれ、「ドイツ民族の東の守り」としてのズィーベンビュルゲンでは既に大規模な祭典が挙行できなかった(鈴木 2020)。

生誕百年祭を祝って以来、ルターとシラーの両者がズィーベンビュルゲンの「ザクセン人」のアイデンティティの象徴であった。彼らはルターによって精神的にザクセン人と同化した「ザクセン人」になったのであり、ドイツ・オーストリアが大ドイツ主義と小ドイツ主義の狭間で揺れる1859年のシラー祭を祝うことでザクセン人同様小ドイツプロイセンと同化し、国家社会主義に飲み込まれつつ完全にドイツ人となった。これは彼らが時代ごとに与えられていたハンガリー、オスマントルコを宗主とするトランシルヴァニア、二重帝国化のハンガリー、現在のルーマニアという書類上の国籍とは全く別の意識の中の国籍である。

## 文 献

- Conze, Werner (1985) *Luthertum und Nationalismus – Deutsch-Protestantismus*. in *Luther und Siebenbürgen*. Herausgegeben von Georg u. Renate Weber. Böhlcr Verlag Köln Wien
- Daugisch, Walter (1990) Die Nationsuniversität der Siebenbürger Sachsen im 16. Und 17. Jahrhundert. in: Kessler (Hrsg, 1990) S.179-216
- Damm, Sigrid (2004) *Das Leben des Friedrich Schiller*. Insel/Frankfurt a. M u. Leipzig
- Fabricius, Hans (1932) *Schiller als Kampfgenosse Hitlers*. Nationalsozialismus in Schillers Dramen. Verlag Deutsche Kultur Wacht, Schön/ Berlin
- Kessler, Wolfgang Hrsg. (1990) *Gruppenautonomie in Siebenbürgen. 500 Jahre siebenbürgen-sächsische Nationsuniversität*. Böhlcr/Köln, Wien
- Killyen, H von u. Kuchar, W. Hrsg. (1998) *Die Honterusschule zu Kronstadt*. Verlag Neue Kronstädter Zeitung, München
- Klein, Karl Kurt (1935) *Der Humanist und Reformcr Johannes Honter*. /Hermannstadt/ Verlag. Der Krafft & Drotleff A. G.
- Klein, K. K. u. Schmidt, L. E. (1961) *Siebenbürgisch-deutscher Sprachatlas*. In 3 Bdn. N. G. Elwert Verlag./Marburg
- Klein, Karl Kurt (1961) Flandrensis in Siebenbürgen. in: *Zeitschrift für Mundartforschung* XXVIII. Jahrgang, Heft 1. S. 43-69. Franz Steiner Verlag./Wiesbaden.
- Klein, Karl Kurt Hrsg. (1966) *Luxemburg und Siebenbürgen*. Böhlcr Verlag./Köln, Graz.
- Logge, Thorsten, 2014: *Zur Medialen Konstruktion Des Nationalen: Die Schillerfeiern 1859 in Europa Und Nordamerika*. Vandenhoeck & Ruprecht.
- Nussbächer, Gernot (1998) *Johannis Honterus – Sein Leben und Werk im Bild*. Kriterion Verlag./Bukarest
- Schiller, F. (1799) *Wallensteins Lager ; Die beiden Piccolomini ; Wallensteins Tod*. Hrsg. von Anton Birlinger (Deutsche

- National-Litteratur : historisch kritische Ausgabe / unter Mitwirkung von Dr. Arnold ; herausgegeben von Joseph Kürschner ; Bd. 122, 1. Abt. . Schillers Werke 5. T., 1. Abt.) Verlag von W. Spemann/Berlin u. Stuttgart (刊行年記されず)
- Schiller. F. (1790-92) *Geschichte des dreißigjährigen Kriegs*. Hrsg. von R. Boxberger (Deutsche National-Literatur: historisch kritische Ausgabe Bd.128. Schillers Werke (Hrsg. Joseph Kürschner 11. T.) Verlag von W. Spemann/Berlin u. Stuttgart (刊行年記されず)
- シラー・渡辺格司訳 (1943,44)『三十年戦争史』第一部、第二部 岩波文庫
- Teutsch, Traugott (1898) *Johannes Honterus. Drama in drei Aufzügen*. Verlag. Von Heinrich Zeidner/ Kronstadt
- Vlaicu, Monica Koordinator (1996) *120Jahre öffentliches Archiv in Siebenbürgen*. Staatarchiv Hermannstadt. Editura Tennis-Club-Sen Sibiu/Hermannstadt
- Wagner, Ernst (1995) Die Siebenbürger Sachsen vom Mittelalter bis zur Habsburger Zeit. in: *Die Deutschen in Ostmittel- und Südeuropa*, Bd. 1. Herausgegeben .von K. Zach, Südostdt. Kulturwerk/Wien.
- Weber, Deorg u. Renate Hrsg. (1985) *Luther und Siebenbürgen*. Böhlau/Köln, Wien
- Wiese, Benno (1961) Die Religion Friedrich Schillers. In: *Schiller. Reden im Gedenkjahr1959*. Hrsg. von Bernhard Zeller. Ernst Kett /Stuttgart
- Zöllner (1990) *Geschichte Österreichs*. 8. Aufl. Wien/Verlag für Geschichte und Politik
- 奥村淳 (1987)「ハンパツハ祭について:「ああ、シルダ、我が祖国よ」(ハイネ)」山形大学紀要、人文科学 11 (2)、pp. 131-162
- 木村靖二編 (2001)『ドイツ史』山川出版社
- 鈴木道男 (2002)「ズィーベンビュルゲン・ザクセン人の起源とアイデンティティーの変遷について」東北大学大学院国際文化研究科『平成 13 年度国際文化研究科研究プロジェクト経費研究成果報告書』S. 1-8
- 鈴木道男 (2020)「シラーを祭り上げた「民族」のその後 トランシルヴァニアのシラー祭Ⅲ」東北大学大学院国際文化研究科『国際文化研究科論集』第 28 巻 17-30 頁
- 鈴木道男 (2019)「戦間期と「国家社会主義者」シラー トランシルヴァニアのシラー祭Ⅱ」東北大学大学院国際文化研究科『国際文化研究科論集』第 27 巻 1-13 頁
- 鈴木道男 (2018)「トランシルヴァニアのシラー祭—1859 年の生誕百年祭・1905 年の没後 100 年祭を中心に—」東北大学大学院国際文化研究科『国際文化研究科論集』第 26 号 29-42 頁
- 鈴木道男 (2007)「ディアスポラの紐帯としてのアンソロジー—『故郷の心』とズィーベンビュルゲンの国家社会主義について—」『東北ドイツ文学研究』(50) 121-142 頁
- 鈴木道男 (1997)「ルーマニアのドイツ言語語島の文化的意味について I. 三つの言語島の過去と現在」東北大学言語文化部『言語と文化』第 8 号 125-144 頁
- 徳善義和著・石居正己訳 (1979)『アウグスブルク信仰告白とその解説』聖文舎